

活字を友とする人と

本屋と図書館の

物語

鳥取を  
「図書館先進県」  
に変えた  
50年



鈴木暁彦

AKHIKO SUZUKI

・安藤隆一

RYUICHI ANDOU

## はしがき

日本海に面する人口最少県の鳥取は、現在の県立図書館ができるまで、「図書館後進県」を自認していました。旧県立図書館は貧弱で、市町村に公共図書館はほとんどありませんでした。それが今では、全国有数の図書館先進県と言われています。背景に何があったのか。これまでの経緯を記録と証言に基づいて、解明しようと考えました。

鈴木と安藤の共著としています。私たちはいずれも、図書館学や書店論の専門家ではありません。本を読む、本を活用して、モノを書く、モノを考え、それを形にすることを仕事にしてきた人間です。その視点で、本、本屋、図書館の現状とそれらを取り巻く環境、活字文化、すなわち「知的空間」の未来について語りたいと思います。

本の中では、半世紀という時間軸の中で、図書館をめぐる鳥取県の歩みを振り返っています。著者の一人、安藤は、鳥取で生まれ育ち、大学卒業後にUターンして鳥取県庁で長く勤めました。同時に自宅を編集室とし、手弁当でタウン誌の編集、発行に携わり、そこでさまざまな人脈を広げました。鈴木は県外生まれで、大学卒業後に入社した新聞社の都合で1985年4月、新人記者として鳥取に赴任し、その時に図書館問題取材しました。友人たちとその時に出会い、鳥取を離れ

てからも交流が続いていました。

この本の立ち位置は次のとおりです。記録された一次資料と当事者の証言に基づき、事実を積み上げる。鳥取県の本屋と図書館の関係性について、ドキュメントとして「歴史」を再現したうえで、自分たちの考察を加える。書店と鳥取県立図書館の連携や活字文化の現状をどう捉え、将来をどう見据えるかを記述する。

この本は、本屋と図書館の話が中心となっています。個性的な店主が営んできた定有堂書店、山陰地方を代表する今井書店グループ、図書館界で評価が高い鳥取県立図書館を核として、活字を友とする人と本屋と図書館の物語を紡いでいます。

物語の筋は次の通りです。鳥取に家庭文庫や地域文庫が生まれたのは50年余り前。文庫の仲間い書店や行政関係者も加わって、図書館づくり運動に発展しました。その後、新しい県立図書館と市町村立図書館の整備が始まりました。

証言によると、鳥取県立図書館が現在の評価を得るまでの背景には、当事者の相当な危機感がありました。戦後の図書館は「市民の図書館」を掲げた東京都日野市立図書館をモデルとし、貸出冊数を重視する姿勢を取りました。「無料貸本屋」の批判は消えず、現役世代の住民からは「自分たちの仕事や暮らしには関係ない」という印象を持たれてしまった、というのです。そのイメージを払拭しようと、新しい鳥取県立図書館は「県民の役に立ち、地域に貢献する図書館」を前面に掲げ、ビジネス・就職活動支援、医療・健康情報、暮らしの困りごと支援のような新機軸を次々に展開し

ました。常勤司書の大量採用は大きな起爆剤となり、県内の学校図書館に生命が吹き込まれました。

同時に、市町村立図書館や大学図書館、図書館以外の施設と連携し、一体となって課題に取り組みることによって、公共政策として県民全体に図書館サービスを提供する、という説明が可能になっています。このようにして「公共図書館の鳥取モデル」が生まれたことで、貸出ばかりが目された日野市立図書館モデルをようやく乗り越えることができた、と言えるかもしれません。

本屋の危機、図書館の危機が、マスコミで報じられます。実は、本屋も図書館も、「中の人」（内部関係者）だけでは成立しない仕事です。活字情報が必要とする「購読者」「利用者」の存在があって、初めて仕事が「完結する」性格を持っています。購読者、利用者がいない本屋、図書館は、存続できない運命にあります。そういった人間関係の広がりを中心に、活字文化が維持・継続される、という仕組みなのです。ですから、本屋や図書館を支援すると言っても、購読者、利用者を前提にしない応援は、意味をなしません。この本を作成する過程で、そうした当たり前の事実を改めて気づきました。

全世界の7割の人がインターネットを利用し、日本ではほとんどの人がスマートフォンを所有する時代。気軽にグーグルに質問し、生成AI（人工知能）を話し相手、相談相手になっている人も少なくありません。インターネットには、情報源として、信頼性に疑問がある「切り抜き職人」の動画が満載。文字情報でも「コタツ記事」といって、電話取材さえしないで、テレビで流れた発言の一部をただ短くまとめて、あたかも自分で直接取材した別のニュースのように仕立ててオンライ

ンで流す「記者」や新聞の電子版も存在するので、発信に携わっている素人も職業人も、責任は重いと感じます。活字文化の危機を語る以前に、「読むとスカッとする」「スッキリ心が晴れる」効果を狙った偽情報や誤情報が氾濫しています。大学の授業のテーマにも取り上げながら、そんな思いを巡らせています。

本書の記述は、鈴木が担当しました。(文中敬称略)

鈴木 暁彦

## 目次

はしがき	3
第一章 定有堂書店と図書館フォーラム	13
(1) 街の本屋の閉店情報	14
(2) 読書会フォーラムの開催	17
(3) 定有堂主催「読む会」の始まり	18
(4) 「読む会」の様子	21
(5) 定有堂閉店の顛末	27
(6) 街の本屋と公共図書館の連携	33
(7) フォーラムの公式報告	38

## 第2章 街の本屋とタウン誌

- (1) 定有堂と県立図書館……………44
- (2) 書店の「見計らい」……………47
- (3) 定有堂と小冊子……………51
- (4) 小冊子の先達・タウン誌『スペース』……………56
- (5) タウン誌『スペース』と図書館……………63
- (6) タウン誌『スペース』を振り返る企画展……………69

## 第3章 今井書店グループと永井伸和

- (1) 本屋と公共図書館の連携……………74
- (2) 地域・児童文庫と「本の会」……………78
- (3) 図書館づくりシンポジウム……………83
- (4) 「全国で一番下のビリ」の県……………87
- (5) 図書館司書から書店員に……………90
- (6) 急展開する県立図書館計画……………93
- (7) 古い新聞連載の指摘と40年後の「回答」……………96

- (8) 「本の国体」と「本の学校」……………100

## 第4章 地域社会と今井書店グループ

- (1) 創業100年と「約束手形」……………108
- (2) 西洋医学を学んだ創業者……………111
- (3) 「文人社」と戦後の復興……………114
- (4) 受け継がれる「文人社」の精神……………120
- (5) 3団体相乗りのミニコミ誌……………123
- (6) 情報発信基地『かわら版』……………127

## 第5章 鳥取県立図書館と「鳥取モデル」の提示

- (1) 新しい県立図書館の歩み……………134
- (2) 「国内最高」の評価……………137
- (3) 危機感から改革に乗り出す……………140
- (4) ビジネス・就職活動を支援……………146

(5) 健康情報の提供と暮らしの困りごと支援	152
(6) 多様なサービス、児童書は全点購入	158
(7) 県内各所への本の貸出と配送	163
(8) 学校図書館支援センター	165
(9) 前館長小林隆志のメッセージ	172

## 第6章 県民全体に図書館サービスを提供する

(1) 学校図書館と常勤司書採用	186
(2) 雇用のニューディール政策	191
(3) 「目指す図書館像」の策定	195
(4) 図書館職員の仕事ぶり	198
(5) 司書と学校図書館	201
(6) 学校図書館を学びの場に	204
(7) 図書館に支えられて	207
(8) 全市町村に図書館応援団を	213
(9) 公共政策としての公共図書館	216

## 終章 共著者による対談

あながき	238
------	-----

## 資料編

(1) 永井伸和と図書館づくり運動に関する年譜	242
(2) 今井書店グループ経営者の系図	249
(3) 鳥取県立図書館の沿革	250
(4) 統計データから見た鳥取県の公共図書館	262

## 参考文献

索引	274
----	-----

第5章

鳥取県立図書館と「鳥取モデル」の提示



鳥取県立図書館の闘病記文庫コーナー

## (1) 新しい県立図書館の歩み

鳥取県は1990年3月に古い県立鳥取図書館、6月には県立米子図書館をそれぞれ廃止した。県庁の目の前に広がる鳥取大学附属小・中学校跡地に新しい県立図書館を建て、1990年10月1日に業務を始めた。市町村立図書館も県の後押しで、次々に整備されていった。元館長の網浜聖子は、『鳥取県立図書館30周年記念誌』の中で、30年を約10年ごとに分けて、時代区分を試みている<sup>1</sup>。

最初の10年は「創設期」として、市町村立図書館の整備に専心した時期<sup>2</sup>だった。その成果として、昭和の時代（1989年1月まで）にはわずか4館しかなかった県内の市町村立図書館も、2015年には全19市町村に図書館が設置され、各館による住民サービスが実施されるようになった。

次の10年は「飛躍期」と位置付けた。全県立高校に常勤司書が配置され、いくつかの病院においても図書室が設置される等、県内の状況も大きく様変わりし、県立図書館のサービス対象館も増えた。これらの図書館は、館種を超えた図書館ネットワークによって緊密に結びつき、県立図書館もこのネットワークを通して、すべての県民に資料を届けられるよう努めてきた。県立図書館は「県民に役立ち、地域に貢献する図書館」を目指して、ビジネス支援サービスや医療・健康サービス等、先進的なサービス事例を実施し、そのノウハウを他の図書館へ紹介してきた。

その積み重ねが、外部の組織や専門家による客観的な高い評価につながった。2006年11月の図書館総合展で、特定非営利活動法人・知的資源イニシアティブ（IRI）が主催する第1回「ラ

イブラリー・オブ・ザ・イヤール」で大賞に選ばれた。ビジネス支援をはじめとしたサービス展開、市町立図書館（当時、西伯郡日吉津村図書館は未開設）や学校図書館との連携による県全体の図書館サービス向上に取り組んでおり、地域の役に立つというこれからの図書館のあり方を示している、と評価された。

2016年11月には、県立図書館と県内図書館ネットワークに対して、「ライブラリー・オブ・ザ・イヤール」に新設されたライブラリアンシップ賞を授与された。賞の推薦文は「鳥取県立図書館は、ビジネス支援サービスや県内公共図書館・学校図書館との連携ネットワークの構築による社会全体の知的基盤整備に努め、『地域の役に立つ図書館』というこれからの図書館像を確立し、リードしてきた。これからの図書館のあり方に対する、10年間にわたる課題提起および貢献を特に評価した」と記されている。鳥取県では2015年6月、図書館の空白地域だった日吉津村に図書館が開館し、

1 網浜聖子（2021）「これからも進化する図書館であり続けるために」『鳥取県立図書館30周年記念誌』、

1-2ページ

2 図書館の種類は一般的に、公共図書館（公立・私立）、国立図書館（国立国会図書館東京本館、関西館、国際子ども図書館）、学校図書館、大学図書館、専門図書館に分けられる。公立図書館（都道府県立・市町村立）という分類もある。

資料編 (3) 鳥取県立図書館の沿革<sup>2)</sup>

## 1 旧県立鳥取図書館

- 1927年 鳥取県議会において、御大典事業として図書館設立の件可決(12月22日)
- 1929年 文部省、県立図書館設立を認可(8月10日)
- 1930年 前年9月、建築に着手した本館、書庫、講堂が竣工(12月10日)
- 1931年 講堂において修祓式を挙げ、閲覧室で落成式を挙行(7月18日) 閲覧開始(7月21日)
- 1933年 鳥取県訓令をもって中央図書館に指定、告示(11月22日)
- 1943年 鳥取地方に大地震起こり被害甚大、閲覧業務を一時停止(9月10日)
- 1945年 図書館施設を県庁舎に充当するため、全館移転命令を受ける(7月1日) 疎開先より順次復帰して、閲覧業務を開始(10月23日)
- 1947年 天皇陛下、本館に行幸される(11月27日)
- 1948年 米子分館、米子医大にて開館(5月1日)。設置は前年11月28日) 倉吉分館、打吹駅前「蔦屋」にて開館(11月16日、設置は前年11月27日)
- 1949年 日野分館、日野高等学校(日野町)内で開館(10月1日)

- 1950年 図書館法施行。全館閉架式のところ、一部閉架式を採用実施(7月20日)
- 1951年 米子分館の本館昇格決定、日野分館が同館の分館となる(10月1日) 八頭分館、郡内町村の寄附と県費により国中村にて開館(12月18日)
- 1952年 鳥取大火発生、一部建物被災、周辺は焼野原となって罹災者収容、閲覧中止(4月17日)
- 1953年 気高分館にて県内初の自動車文庫を開始(郡内のみ、6月27日)
- 1957年 視聴覚ライブラリーを県教育委員会事務局社会教育課へ移管(4月15日)
- 1958年 鳥取県立図書館協議会に関する条例公布(4月1日)
- 1964年 本県出身者著作物の保存紹介のため、県人文庫を設置(11月1日)
- 1967年 小学生への貸出しを開始(8月1日) 明治百年事業の一環として、鳥取藩史(全7巻)刊行決定(10月19日)
- 1971年 気高分館廃止(3月31日)
- 1975年 鳥取藩池田家資料の県立博物館への移管を完了(4月1日)
- 1976年 八頭分館廃止(3月31日)

## 索引

### 【あ行】

赤碓町立図書館（鳥取県） 78,98  
秋田県立図書館 210  
朝読書 203,227,228  
海士町中央図書館（鳥根県） 179  
網浜 聖子 134,135,195  
【アメリカの鳥】（ジョン・ジェームズ・  
オーデュボン） 48,49,50  
安藤 文雄 46,194,227  
安藤 理恵 76,201,228,240,243  
井狩 春男 45  
いきいきライフ応援（鳥取県立図書館）  
160,258  
【逝きし世の面影】（渡辺京二） 101  
井澤 尚之 65,66,90,91,92,93,222,  
240  
石井 敦 77,86,87,92,242  
石井 桃子 77,79,92,242  
磯谷 奈緒子 179  
五木 寛之 130  
移動図書館車（ブックモバイル）  
77,90,98,99,243,244  
糸賀 雅児 136,257  
今井 彰 113,114,249  
今井 兼文（初代） 110,111,112,249  
今井 兼文（二代） 112,249  
今井 兼文（三代） 78,101,104,105,  
108,112,113,115,244,249  
今井 康子 80,112,113,115,120,249  
岩田 直樹 15,16,18,20,21,23,24,25,  
37,39,40  
岩手日報 158,215  
上村 松園 113

大石 清人 100  
大江 賢次 109,110,114,120,121,258  
大阪市立中央図書館 89  
大阪府立図書館 212  
太田 由紀子 85  
岡村 知子 57,63,69,70  
【音信不通】（定有堂書店） 30,46

### 【か行】

会計年度任用職員・非常勤職員  
168,187,190,192,197,201,204,228  
嘉賀 収司 76,200,240  
影井 亮 78,108,120,121,122,130,  
243,244  
課題解決（型）・課題解決支援 138,  
139,140,151,152,157,175,178,180,  
181,183,197,211  
片山 善博 141,143,186,187,188,189,  
191,192,193,224,226,247  
活字文化・活字離れ 3,4,5,6,16,18,  
35,38,40,41,74,136,159,208,217,  
218,232,240,261  
家庭文庫 4,63,64,74,80,89,96,97,  
98,102,103,221,238,242  
金澤 瑞子 80  
河北新報 158,215  
川崎 安子 209,210,212,240  
関係人口 180,181,216  
金田一 秀穂 36  
久保 輝巳 66,91,103,245  
倉吉おや子劇場 81,82,83,85,242  
倉吉市立図書館  
（旧鳥取県立鳥取図書館倉吉分館）  
84,90,99,215,250,252,253,257  
県民に役立ち、地域に貢献する図書館  
（鳥取県立図書館） 16,134,197,199

著者略歴

**鈴木 暁彦** (すずき・あきひこ)

長崎県立大学国際社会学部国際社会学科教授。早稲田大学法学部卒、放送大学大学院文化科学研究科修士課程修了・修士（学術）。1962年生まれ。1985年朝日新聞入社、鳥取、神戸支局員、東京・大阪経済部員、北京支局員（中国総局員）を経て大阪経済部次長、広州支局長などを務める。退職後、関西学院大学国際学部国際学科の非常勤講師などを経て2016年4月から現職。マスコミュニケーション論などを担当。共著に『奔流中国 21世紀大国の素顔』（朝日新聞出版）、『奔流中国 21世紀の中華世界』（朝日新聞社）。

**安藤 隆一** (あんどう・りゅういち)

元鳥取県立公文書館長、鳥取市のタウン誌『スペース』の元編集長・発行人。関西学院大学経済学部卒、同志社大学大学院総合政策科学研究科博士後期課程修了・博士（政策科学）。1948年生まれ。1977年鳥取県庁入庁、労働雇用課長、公文書館長などを歴任。退職後、しんきん南信州地域研究所主席研究員（飯田市）、岡山理科大学総合情報学部（現情報理工学部）非常勤講師を務める。著書に『ほんものの地域づくりへ』（小取舎出版）。編著に『地域づくり読本』（文理閣）。共著に『入門・文化政策』（ミネルヴァ書房）、『観光文化と地元学』（古今書院）。

---

## 活字を友とする人と本屋と図書館の物語

### —鳥取を「図書館先進県」に変えた50年

---

2026年7月25日 第1刷発行

---

著 者／鈴木暁彦・安藤隆一

発 行 者／山下浩

発 行 日／日外アソシエーツ株式会社

〒140-0013 東京都品川区南大井6-16-16 鈴木ビル大森アネックス

電話 (03)3763-5241 (代表) FAX(03)3764-0845

URL <https://www.nichigai.co.jp/>

---

組版処理／有限会社デジタル工房

印刷・製本／シナノ印刷株式会社

---

©Akihiko SUZUKI, Ryuichi ANDOU 2026

不許複製・禁無断転載

（中性紙北越淡クリームキンマリ使用）

<落丁・乱丁本はお取り替えます>

ISBN978-4-8169-3108-6

Printed in Japan, 2026